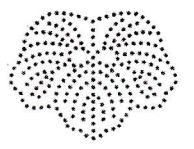


「りゅうま伝」は高野の分身がお客様のところへご挨拶に向う。という気持ちでお届けしています。



りゅうま伝

52号

2024年3月22日

高野 竜馬

「不適切にもほどがある」

10数年ぶりにテレビドラマにハマっている高野です。「不適切にもほどがある」という令和と昭和を行き来するタイムスリップ・コメディです。

「この主人公は1986年から時空を超えてきたため、現在では不適切な発言を繰り返します。言語表現の時代による変遷を描くというこのドラマの特性をご理解の上、ご鑑賞下さい。」なんて、テロップも突入するよ。うな笑えないような……

今、50代の私でさえ、「もうだった、そうだった」と思い出す昭和もありました。例えば路線バスの中での喫煙シーン。

確かに私が子どもの頃は、路線バスにも吸い殻入れがあり、親父も吸ってたんですよね。

思い出します。嫌煙家にとっては、さぞ大変な時代だったことでしょう。

一方、「ハラズメント」や「コンプライアンス」なんて言葉は、昭和には無く、ずいぶん窮屈な世の中になったもんだと感じます。

令和の世、パワハラを気にするあまり、「頑張り」という言葉さえためらう風潮に昭和10年生まれ53歳の主人公、市郎はこう言います。

「期待して、期待に心えまして、叱られて励まして、頑張り……、そうやってかかわり合って強くなるのが人間じゃねえの？頑張り、って言われてくじけちゃうよ。どっちみち続かぬえよ。この言葉共に共感する私も昭和の男」なのでしよう。

こんな風に、このドラマは時代とともに私達が得たもの失ったものについて考えさせてくれます。ただ、笑いの中にも毎回ウルッとするものもあります。恋愛感情だったり、親子・夫婦関係だったり、人が人を感じる気持ち。は時が変われど不変ですね。

例えば市郎が令和のテレビに出演することになった話のこと。令和2世代vs昭和おやじ世代のバラエティ番組での市郎の回答に現場は盛り上がり上がります。

すると昭和から来たスケバン純子は自分の親が叱咤激励しているのを見て、「なんだよ今の、人の親父を小バかにして、若い子ば、かひいさしやがて、謝んなよ、失礼じやん。要するにさらし物じやん。うちの親をバかにしていいのはな、娘の私だけなんだよ！」というせざるなら面白くやめよ。笑えぬえ全然面白くぬえ。」

と吐き捨てます。娘が父親を思う気持ちにグッときつっ、みんなご一人を袋叩きにする文化を切り捨てます。

また、その後「お年だってこんなものかよ」という言葉には、ハッとさせられました。こんな時代を作って来た私達の責任を問われている気がしたからです。

未来を作るのは「今」の自分なんだということを教えてくれる、このドラマもまもなく最終回。最後までお楽しみ下さい。



たかの財形事務所

〒819-0374 福岡市西区千里 707-13

☎090-3407-2123

https://www.takanozaikai.com x-1/fp.takano@gmail.com